

「会員短信 3」

「絵と俳句と余白について」 稲沢進一

水彩画クラブに参加して五年になります。「物をよく見て描いて下さい」とはよく言われることですが、それは無理なことかと思われます。幾度注意深く観察しても、その度に形が変化して見えるからです。

ある日、葱坊主の絵を描きました。しかし、不評だったため、「没」として当家の押入れに保存することになりました。その時、「色々あつて大変葱坊主」と詠みました。ふと、上手くいかないのは大変だけれど、かと言って何もないのもつまらないと思い、一週間後、この句を「真つ直に生きて退屈葱坊主」としました。絵は死んで日の目を見ませんでした。俳句となって若干の笑いが生まれました。

客観写生とは、どこまでも正確を追求すべきで、絵の場合、静物の写生は物と物との関係、光と影にて成立します。私の描く絵は、物と物との境界が曖昧で余白が多いとの指摘を受けるのですが、「絵は俳句であり、また俳句は絵である」と思うようになりました。

「法師蟬言語明瞭意味不明」。また、私は、俳句は意味不明でも良いとも考えております。なぜなら、人は理解不能の時に思わぬ余白ができ、その余白に笑いが生まれると思うからです。

物は不確かですが、言葉は残ります。現代の溢れるような言葉の中でも詩は残ります。俳句という詩を詠み続けたいと、夢はまだまだ続きます。